雇用失業統計研究会（第26回）議事概要

１．日時　令和８年７月24日（金）14:00～16:00

２．場所　Web会議による開催

３．出席者（構成員）

	神林　龍	武蔵大学経済学部教授
	黒田　祥子	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
	玄田　有史	国立大学法人東京大学 社会科学研究所教授（座長）
	篠﨑　武久	早稲田大学理工学術院創造理工学部教授
	原　ひろみ	明治大学政治経済学部教授
	原田　一紀	東京都総務局統計部社会統計課長
	菱谷　文彦	厚生労働省職業安定局雇用政策課長
（オブ）	小此木 裕二	厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当)付参事官 (企画調整担当)付統計管理官

（統計局）　阿向統計調査部長、山本調査企画課長、
小川労働力人口統計室長
就業構造基本調査担当：池浪課長補佐、菅谷係長
労働力調査担当：三浦課長補佐

４．議題　（１）令和９年就業構造基本調査の検討課題―調査項目、調査方法―
（２）労働力調査における就業異動のより的確な把握について

５．議事の概要

（１）「令和９年就業構造基本調査の検討課題―調査項目、調査方法―」（資料１）

【国籍の把握について】

・　調査票や説明資料については、日本語以外の言語は用意するのか。日本語が不慣れな方への対応はどうなっているのか。

→　調査票については、７カ国語用意する予定だが、オンライン回答については、現状英語版しかないため、その状況下でどのように対応するか検討が必要。実査の現場では外国人への対応で混乱がないように、例えば、リーフレットに外国語の案内を掲載したり、キャンペーンサイトに外国人の方向けのページを作り、そこに関係資料を用意するなど、色々と出来るフォローはしっかりとやりながら、調査の準備をしていきたい。

・　今回の調査票では、外国籍の方を「永住者・定住者等」と「その他」の２つにカテゴリーに分けているが、今後外国人労働者がどんどん増えていく中で、在留資格や就労資格についても、もっと細かく把握出来るようにした方が良いのではないか。

→　紙面を割いて30近くある在留資格の選択肢を用意することは困難である点、フリー記入であれば製表過程でのリソースが読めない点などの課題がある。さらに、設問の設定に当たって関係省庁にも相談したが、回答可能性としては在留カードを見て明確に分かる基準であることが重要で、これらを踏まえると、就労制限の有無によって「永住者・定住者等」とそれ以外の在留資格の方が「その他」、というくらいのシンプルさで設計するしかないと考えたもの。まずは今回この形で一度調査をやらせてもらい、2032年以降の調査においても、国籍・在留資格の把握方法については引き続き検討していきたい。

・　国籍が２つ以上ある方は、どうように記入すれば良いのか。
→　基本的には国勢調査と同じルールで行う。日本国籍がある方については、日本にマークしていただくやり方を考えており、そのあたりは「記入のしかた」でもしっかりと伝えていきたい。また、外国籍を２つ以上お持ちの方については、そのうちの１つを書いていただく。

【副業について】
・　おもな副業の「おもな」というところには何か定義があるのか。
→　おもな仕事というのは就業時間が長い方、または収入の多い方とすると定義しており、おもな副業についても、同じような定義で書いていただくよう「記入のしかた」にも、掲載する予定である。

（２）「労働力調査における就業異動のより的確な把握について」（資料２）
・　今回の変更によって、転職と追加就業の別が分かりやすくなった。他方、「就業時間を増やすことができますか」との表現については、就業時間を増やすという判断を労働者自身ができるかどうかは疑問であり、労働者にとっては答えづらい質問ではある。　　→働く時間を決めるのは使用者側が決定権を持っているが、労働力調査では、回答者がどのように認識しているかについて問うものと認識している。回答者にとって理解しづらいという点については、調査票上でも補足説明を入れているが、記入方法について分かりやすい説明を心がけたい。
・　Ａ６について、「今の仕事のほかに別の仕事も」という表現は、「ほかに」と「別の」が重複しているような印象がある。
→　現行の調査票に変更する前は、「転職などを希望していますか」という設問の中に、転職と追加就業の選択肢が分かれて存在していた。その際、「今の仕事のほかに別の」という表現を使用しており、その表現をもとにして文章を検討した。
・　Ａ７の「今より就業時間を増やすことができますか」という文言について、表現の短さが少し気になるが、現時点では別案もないため、ひとまずこの案でよいのではないか。
・　表現ぶりについてはさまざまな意見があり、なかなかベストな文章というものは受け取る人によって違うので、全員にとって分かりやすい表現というものはない。また、初めて見る人にとっての分かりやすさと、調査を継続的に見ている人にとって感じる違和感は、少し異なるのかもしれない。そのあたりについては、パイロット調査なども行いながら検討いただきたい。

（以上）